

『大阿弥陀経』の成立過程について

壬 生 泰 紀

〈無量寿経〉の最古訳『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』(T. 12, No. 362: 以下『大阿弥陀経』と略す)は、その成立の古きゆえに、原始浄土思想の様相を我々に伝えるテキストである。この『大阿弥陀経』がいかなる過程を経て成立したのかについては浄土思想を研究する上で重要な課題の一つといえる。現在、この問題に対して種々の見解が出されているが、いまだ解決には至っていない。

今発表は、いかなる過程を経て現行の『大阿弥陀経』が成立したのかを明らかにしようとするものであった。『大阿弥陀経』の構成要素、往生思想、阿弥陀仏観、経題の4つの視点からアプローチすることによって、その成立過程の解明を試みた。結果、以下の通りのことを指摘した。

- (1) 現行の『大阿弥陀経』は、「仏身の教説」(300b19-303b1)と「仏土の教説」(303b17-317c16)の2つの内容に大別でき、それらを構成要素として成立したものと考えられる。
- (2) 往生思想に注目した場合、疑念往生が説かれる「仏土の教説」の方が、それが説かれない「仏身の教説」よりも後に成立したと考えられる。
- (3) 「仏身の教説」に見られる光明の記述は、阿弥陀仏の元来の名前とされる中期インド語 (MI.) Amitāha/ *Amidāha (く Skt. Amitābha) と一致し、古層に位置すると考えられる。一方の「仏土の教説」では、そのような一致は見られず、光明の記述については「仏身の教説」に見られるものを踏襲し、かつ疑念を取り除くという新たな性格を付与している。

- (4) 『大阿弥陀経』の原題であった可能のある MI. **Amitāha*-/ **Amidāha-vyūha* (く Skt. *Amitābhavyūha*) は「仏身の教説」をもって付けられたと考えられる。

以上の4点より、現行の『大阿弥陀経』は、まず「仏身の教説」が先に成立し、それをもとに後から「仏土の教説」が増広されたと推測される。

(龍谷大学非常勤講師)